

# ブータン王国の伝統民家の調査手法と改造変遷

はじめに ヒマラヤ山脈の南麓にあるブータン王国(以下、ブータンとする)は中国チベットとインドに挟まれた小国で、近年まで外国人の入国を制限し、独自性の高い文化を築いてきた。そのためブータンの精神文化的側面は注目されてきた一方で、古建築などの文化遺産の即物的な調査や評価は十分とはいえない状況であった。そこで、奈文研ではブータン内務文化省から協力要請を受けた東京文化財研究所と岡山理科大学などが2012年から実施している民家を中心とする伝統的建造物調査に2016年から参加している<sup>1)</sup>。

ブータンの伝統的建造物の多くは版築の壁で構成した主体部に木造の屋根を架けた構造で、2階、もしくは3階建である。この主体部を中心に版築の壁を増築することで平面を拡大している。こうした躯体を生かしながら変化を遂げ、継承されてきた伝統民家であるが、現在、急激な社会構造変化にともなって首都ティンプーへの人口集中が進むなかで、農村部に残る伝統民家は存続の危機にさらされている。そこで本研究では民家の改造変遷の解明や建築年代の編年をおこない、文化遺産として保護すべき価値の高い物件を特定する礎を築くことを目指している。

**調査対象・方法** 本研究では調査対象とする地域を首都ティンプーおよび西部のプナカ・ハ周辺の集落に限定し、地域的な特性や地域内での建築年代の編年の解明を目的としている。版築の壁の傾斜(内傾)が大きいものほど古いという傾向があることが先行研究により知られており、第一段階の調査として、外観から古式と判断されるものを詳細調査の対象物件として抽出した。詳細調査では個別の民家の平面・断面の実測調査、痕跡調査による改造履歴の変遷の解明、写真撮影、聞き取り等をおこなっている。これは日本の民家調査の手法をブータンへの導入を試みるもので、ブータン人のチームと協同作業とすることで、国際的な技術移転を図っている(図11)。

**痕跡調査** 上記の詳細調査の方法のうち、痕跡調査については版築の壁面の増改築の痕跡、扉・窓などの開口部の改造の痕跡、版築壁の外部の床の根太を差し込んだ穴など、多くの痕跡が残る(図12-⑥⑦)。



図11 日本チームとブータンチームの協同調査の様子

躯体の主要部を占める版築壁の増改築の痕跡は民家の変遷の概要を知る大きな手掛かりである。版築は一定の厚み、高さで単位を構築して造られ、高さ約60cmの積み上げの単位が確認でき、これらの版築は築造の時期によって厚みや高さの単位に差異があるため、その差異から改造の変遷をあきらかにすることができます。

もっとも多くみられる痕跡は版築を継ぎ足して壁を構築したもので、この場合では当初の版築の壁と後補の版築の壁との間に亀裂が生じやすく、壁面にその痕跡が確認できる(図12-①)。さらに増築の場合、版築の下に設けられる基礎の構造が異なることもあり、これも築造の時期差を示している(図12-②)。階高を高くするために版築を積み足すこともある(図12-④⑧)。

また前面に増築し、壁と面一の幅広の大きな窓や出窓が設けられると入口の位置を変更する必要が生じ、これにともなって旧入口を窓に変更する事例もある。この方法による改造では床高まで開いた開口部や扉の軸摺穴にその痕跡を確認することができる(図12-⑤)。改造は複数回にわたることも少なくなく、痕跡の時期を整理することで、改造の前後関係、改造の変遷の解明、当初の民家の形状の復原が可能となる。

**改造変遷** Ingo村(ハ周辺)の民家を例(図12-④、図13)で改造の変遷をみると、2回の改造がなされており、当初の民家の形状がうかがえる。当家は2階建、切妻造、トタン葺の南北棟の建物で、1階を家畜小屋、2階を居室とする。1・2階ともに東側を南北2室に分け、西側は一室とし、北側に細長い部屋を持つ。改造の痕跡は上部の版築の積み足し、西側・北側の版築の増築、2階の背面側の旧入口の痕跡、東西の部屋境の当初の入口の痕跡がある。背面側の旧入口の前には外部に床を張った根太の痕跡が残り、現状は窓をはめる(図12-④⑤)。

これらを整理すると、図13に示したように当初の部分



図12 改造変遷の様々な痕跡

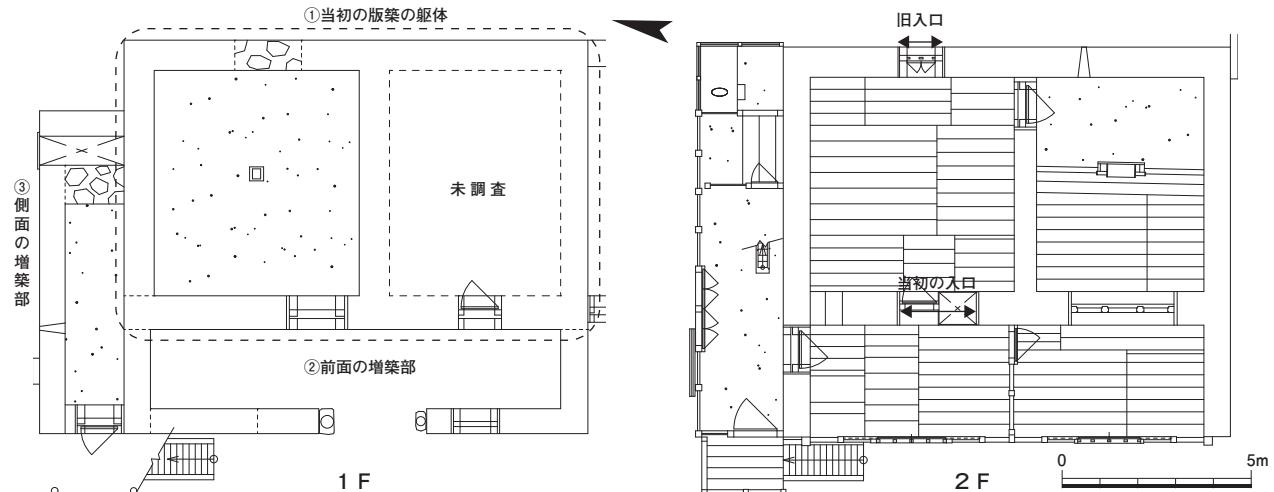


図13 Ingo村の伝統民家の平面図 1:200 (岡山理科大学作図の図面に加筆)

は①部分で、前面に版築が足されて②部分が形成され、その後、北側に③部分が付加されて現在の形になっている。当初の入口は2階の西側にあり、②が増築されたときに入口が背面側に移り、③の付加とともに現状のように北側2階に入口を設けた。また版築の厚さを詳しくみると①約89cm②約72cm③約67cmで版築の厚さが異なり、ここにも建築年代の差異が表れている。

これは一例に過ぎないが、主体部の版築を利用しつつ、その前面、あるいは側面に版築の壁を構築して増築する方法は多くの伝統民家でみられる形式である。増築の際には2階の平側に壁面と面一の窓や出窓等の開口部を設けて採光し、住環境を向上させている。開口部は側面に廻ることもあり、この場合にはより明るい内部空間となり、外観も出窓によって華やかな意匠となり、ブータンの伝統民家の特徴を強く示している。

**おわりに** 本稿では提示には至っていないが、今回の調査を通じて多くの伝統民家の建築年代や改造変遷の情報が蓄積できており、これをもとに建築年代の編年や類

型化をおこなう土壤が整いつつある。冒頭でも述べたようにこれらの情報はブータンの文化遺産保護に向けた重要な基礎資料で、大きな第一歩である。

このようにブータンの伝統民家は家族構成や生活の変化にあわせて、軀体主体部の版築に壁を付け加えることで平面的に拡大し、有機的な外観を形成してきた<sup>2)</sup>。いうなれば伝統民家はブータンの歴史の変遷が刻まれてきた生き証人と言っても過言ではない。現在、破壊の危機にさらされているが、その価値は高く、文化遺産保護に向けた努力の継続が求められているのである。

なお、本研究はJSPS科研費JP16H05759の助成を受けたものである。  
(海野 聰)

#### 註

- 1) 本稿は2018年3月13日にブータンで開催した国際学術会議で筆者が発表した内容を一部含む。
- 2) ほとんど改造を受けておらず、古式を残す伝統民家もわずかながら確認できており、開口部は非常に少なく、閉鎖的な建物であったことが知られる。これらは文化遺産保護の面でも非常に重要な発見である。